

<今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙Ⅱ 5章11-15節>  
キリスト者であることの幸いと使命について熱く語り出すパウロ。

### 1 (11) 主に対する畏れを知るとはどういう意味？ パウロの場合。

すぐ前の箇所で、パウロがこの世の人生だけ考えて生きているのではなく、神様の前に立つ日の来ることを考えて生きていることを知りました(5:1-10)。それに続く11節では、自分のことは全部もう神様に知られており、「**主に対する畏れを知っている**」と語っています。それはどういう意味でしょうか？ この後を読んで行くと分かって来ます。

### 2 (12) パウロが自己推薦する必要のない理由。

コリントの教会はパウロの伝道で出来た教会です。そこに後からやって来て色々自己推薦して教会を混乱させた人たちが現れました。しかしここで、パウロは彼らと同じような自己推薦をする気はなく、あなた方が私から福音を聞いて信仰者となったことで十分ではないかと語っているのです(3:1-3)。ですからこの後、パウロは自分が持つ何か優れた点について語るのではなく、キリストの救いとそれに仕えて来た自分の姿について語るのです。パウロの口癖は「**誇る者は主を誇れ**」(10:17)です。

### 3 (13) パウロは正気なのか、正気でないのか、どちら？

パウロに敵対する人たちはパウロのことを「正気でない」と言っていたようです。しかし聖書から知るパウロの信仰理解ほど冷静で論理的な展開をした信仰者は少ないでしょう。神様に対しては熱い信仰を持つ、しかし人に向かう福音伝道の仕方、その方法は正気極まりないのです。私たちの信仰と伝道のあり方の手本がここにあります。

### 4 (14-15) 私たちの想像を超えた神様の恵みを思い巡らす。

神様が私たちに注いで下さる愛の大きさ深さは、私たちの想像をはるかに超えています(信仰が知解より先)。しかし、私たちは神様が与えて下さった知恵と理解力を駆使して神様の愛を深く覚えて感謝できるようになる努力はしなければなりません。パウロがここでアダムと比較してキリストを思い巡らしているのもその一つと言っていいでしょう。「**主に対する畏れを知っている**」(11)の「畏れ」は「恐れ」とも訳せるのですが(ローマ8:15)、もうパウロにとっては「恐れ」ではないのです。